

Summary

This report deals with the brief description of *Porphyra nereocystis* ANDERSON attaching to *Nereocystis luetkeana* (MERT.) P. et R. which was collected near Bering Island by the training boat "Oshoro Maru" of the Hokkaido University in July 1964.

文 献

- 1) ANDERSON, C. L. (1891): List of California marine algae with notes, *Zoe*, **2**, 217-225. 2) HUS, H. T. A. (1902): An account of the species of *Porphyra* found on the Pacific coast of North America. *Proc. Calif. Acad. Sci. ser. 3, Bot.*, **2**(6), 173-240. 3) SMITH, G. M. (1943): Marine algae of the Monterey Peninsula. 622 p. Stanford Univ. press. 4) 時田郁 (1939): 北海道釧路沖に *Nereocystis* 漂流す。植物及動物, **7**(11). 96-97. ——— (1962): ブルウキモの漂着, 藻類, **10**(3). 16-19.

スサビノリの和名と、いわゆる トモエノリについて

福原英司*

スサビノリは1932年、殖田によって新種として発表され、現在では日本産アマノリ属のなかで最も普通の種類であることは、よく知られているとおりである。

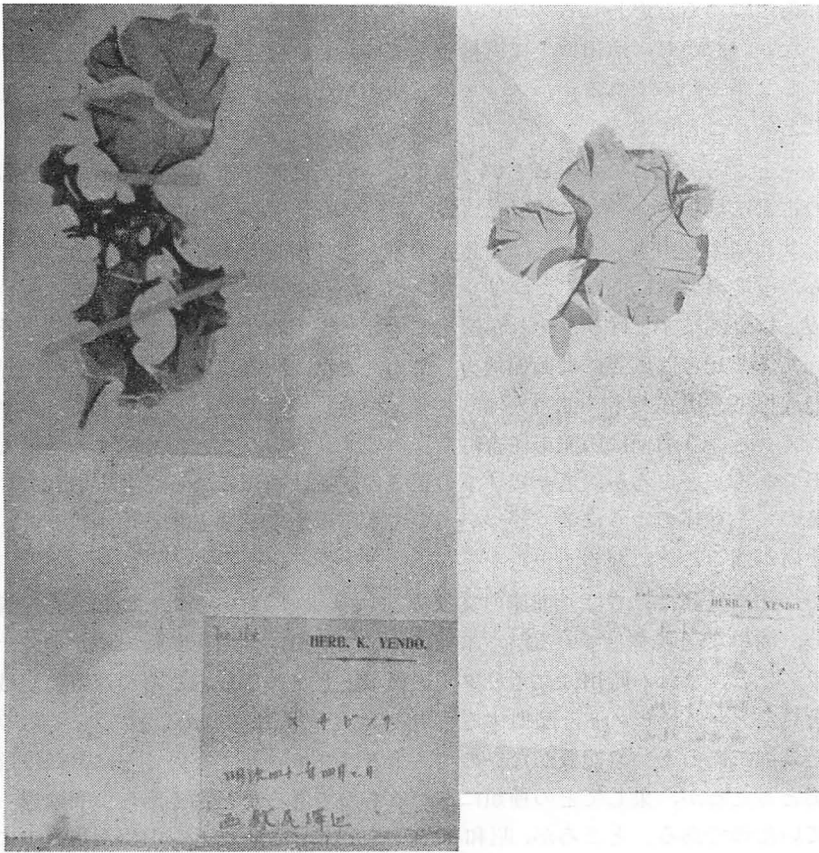
しかし、その原産地については多少の問題点もあり、また和名の由来についてもアサクサノリやウツプスイノリにくらべると、一般に知られていないので、これらの点について若干の論議をくわえたい。

まず第一に、スサビノリの基準標本は殖田の論文 Pl. XV 1~4 のものであるが、これは東京水産大学に所蔵され、すでに黒木も述べているように採集者は大野磯吉氏(元北海道水産試験場員)で産地は室蘭?となっており、採集年月日の記入はない。

一方、スサビノリという名前がはじめて文献にでたのは殖田の論文より24年前の1908年にでた遠藤吉三郎著 函館支庁管内ニ於ケル海苔業ノ将来

* 北海道区水産研究所

The Bulletin of Japanese Society of Phycology Vol. XV. No. 1, April 1967.



第1図

第2図

第1図 スサビノリ 明治41年4月3日函館尻沢辺で採集されたもの

第2図 トモエノリ 明治41年4月3日函館海岸町で採集されたもの

(いずれも東京大学理学部所蔵標本)

(北海道水産調査報文 第一卷)であるが、この著書は現在ではほとんど入手不可能であるので、スサビノリの名前に関する部分を転載すると「第一 すさびのり すさびのりトハ余が今回新タニ命名セル所ニシテ本種ノ産地タル函館尻沢辺ノ地名ヨリ取レルナリ」と。

ところが殖田は、この文献を引用して、そのなかにてでているアカノリについては「あかのり(遠藤称)として、そのまま標準和名に採用したが、同

じ条件にあると思われるスサビノリの和名の由来については、なにもふれていない。しかし、殖田博士に直接教えていただいたところ、やはり遠藤博士にしたがったのであるが、スサビの意味が不明だったために、そのままにしたということである。

ところで、このスサビという言葉については函館市立図書館所蔵の多数の古書に見られ、「蝦夷地名解」によると、尻沢辺「夷語シリシャンペなり、シリとは地と申事シャンとは下ると申事ペとは所と申事」とある。すなわち、土地の形状にちなんだシリシャンペというアイヌ語の地名を和人は尻沢辺というあて字と呼び、それが次第にスサビと簡略化されたものである。そしてスサビとは広義には函館地方一帯の、また、狭義には函館市住吉町沿岸の通称で、現在でも一部の人は「スサビの浜」と呼んでいる。そして、スサビノリという名前は函館市住吉町沿岸産のノリということの意味するものなのである。ところが、スサビノリの正式の記載は殖田によって発表されているので、前述のように？ がついていても原産地は室蘭とするのが正しく、矛盾が残ることになるが止むをえないことと思う。

次に遠藤は、やはり前述の文献に トモエノリ という新しい和名を発表し、簡単な記載をしているが、本種について殖田は「何種ヲ指セルヤ明瞭ナラズとし、また、時田はフリタサの異名としている。ところが遠藤の記載を見ると「スサビノリと酷似する」「厚さは九糸弱(約30 μ)」とあり、そのうえ2層であるという記載がないので、筆者はフリタサでないことは、ほぼ確実と考えるが、果してどの種類にあたるものであるかと古くから疑問に思っていたのである。ところが、昭和40年の初秋に、このことを山田幸男博士に申し上げたところ「その記載のもととなった標本は東大理学部に所蔵されているので見てくるように」と指示された。たまたま、その直後に東京で遠藤博士のトモエノリを調べた結果、この標本は明治41年4月3日に函館市海岸町で採集したもので、スサビノリに同定して誤りないことが分った。また、前述の尻沢辺産のスサビノリとした標本をも調べたが、トモエノリと同じ年月日に採集したもので、明らかにスサビノリであった。それでは同じスサビノリにスサビノリとトモエノリという、ふたつの名前をつけたかについては現在では知る由もないが、おそらくは、潮の流れの早い尻沢辺と静かな海岸町とではノリの感じが相当異なるものもあるので、別種と判断したのではないかと想像される。

最後に有益な御教示をいただき、また、御紹介の労をとっていただいた北大名誉教授山田幸男先生をはじめ東京水大名誉教授殖田三郎先生、東大理学部教授原寛先生、スサビの語源について教えていただいた函館市立図書館長元木省吾氏と同館田畑幸三郎氏等に心から感謝の意を表します。

文 献

- 1) 蝦夷地名解 (年代不明). 2) 黒木宗尚 (1959): 室蘭産のスサビノリについて. 東北水研研究報告, No. 15, 43-56. TOKIDA, J. (1954): The marine algae of Southern Saghalien. Mem. Fac. Fish. Hokkaido Univ., 2(1), 1-264. 4) 殖田三郎 (1932): 日本産アマノリ属の分類学的研究. 水講研究報告, 28 卷. 5) 遠藤吉三郎 (1908): 函館支庁管内ニ於ケル海苔業将来. 北海道水産調査報文, 第一卷.

簡単な藻類培養液三つ

千原光雄*

Mitsuo CHIHARA: Three basal culture media for algae

アメリカの生物教育雑誌 *The American Biology Teacher*, Vol. 27, No. 2, pp. 101-103, 1965 に載った *The Neglected Cryptogams* と題する文章は、短い論文であるが、生物教育に携わるもの、または関心を持つものに、示唆に富んだ内容をもっている。筆者はハロルド・ボールド博士 (Dr. HAROLD C. BOLD)。ボールド博士はテキサス大学の植物学科の主任教授であり、昨年永年勤めていたアメリカ植物学雑誌の編集長の席を退いたが、引続いて現在アメリカ植物学会会長の職にある。専門は淡水藻類、特に土壌藻類の形態分類学的研究。前任地のヴァンデビルド大学の頃を含めて、弟子に恵まれ、中でもインディアナ大学の STARR 博士、テネシー大学の HERNDON 博士、コネチカット大学の TRAINOR 博士などは名が知られている。なおボールド博士は著書に *Morphology of plants*, 1957 や *The plant kingdom*, 1961 などがある。後者は本会会員西田誠氏により訳出され、「植物の世界」の題名で岩波

* 国立科学博物館植物学第二研究室

The Bulletin of Japanese Society of Phycology Vol. XV. No. 1, April 1967.